

優秀賞 お婆ちゃんの「おから」－愛あり、命あり。－

天理高等学校 2年 足立 美紀

「食べること」それは、「生きること」だと私は思います。

私は中学二年生の時に、「摂食障害」と言う病気になりました。中学一年生から二年生にかけて、人間関係が崩れていたり、部活のストレスや、少しダイエットをしていたのもあり、食べ物を食べることが出来なくなっていました。

主食は野菜で、それを油を使わずスープにしたり、ノンオイルドレッシングをかけて食べたりするだけの毎日を送っていました。

栄養が少ない食事の日々の中で、私の体は悲鳴を上げ、一人で起き上がって座ること、一人で立つこと、歩くことが出来なくなっていて、悔しくて、涙が出そうになったのを、今でも覚えています。

食べることが出来なくなるだけで、どれだけ体が動かなくなるか。又、体の外部だけでなく、内部の肝機能が悪くなり、免疫が下がり、心拍数が遅くなって、命の危機が迫ってしまうのかを、身に染みて、感じました。

「食べられない」と言うことは、想像以上に私の「心」をも蝕んでいました。人間不信起こった悪いことすべて私のせいと言う被害妄想、生きることへの無感心など、私は「人間らしさ」と言うものを失いつつありました。

そんな中、私でも食べられるものがありました。それは、私のお婆ちゃんが作ってくれた「おから」でした。野菜以外を拒む私の体でも、お婆ちゃんの作ってくれるおからは、不思議と受け入れられました。おからの具材は「高野豆腐（削って細かくして調理する）・ネギ・椎茸・フィッシュソーセージ・ニンジン・玉ネギ」が主に使われていました。私がよく食べれる、ネギと椎茸を、特にたっぷりを使い、高野豆腐を乾燥したまま大根おろしみたい、ガリガリ削って調理した「高野豆腐おから」を、ほぼ毎日、お婆ちゃんは作ってくれました。今思えば、お婆ちゃんの愛情と、私にどうか食べて、生きてほしいと言うお婆ちゃんの願いがこもった、特別な「おから」だからこそ、私は口に入れ、飲み込むことができ、私の命は、繋がっていたのだと、思います。

それから、家族や周りの沢山の人々に支えられ、私は少しずつ、少しずつ食べられるようになっていきました。

そして、心も体も十分に回復し、学校に復帰し、高校に合格でき、こうして生きています。

何もかもがどん底だったあの日々。不眠症、全身のむくみ、抜け毛、外出禁止など、とても簡単な「食べて飲み込む」と言う動作が出来ないだけで、私の人生は狂わされてしまいました。

そんな中で、私の大好きなお婆ちゃんの「おから」が私の命を救ってくれました。お婆ちゃんの「おから」は、私の中の、一生忘れられない特別な食べ物であり、私の大好きな食べ物です。お婆ちゃんの「おから」が私を助けてくれたように、私も私と同じ病気で困っている人達の命を救えたり、その人たちの力になれるような人になれたらいいなど、思います。